

## 〔新刊紹介〕

### 渡辺澄夫著「大分県の歴史」

旧石器時代の遺跡として丹生・早水台は余りにも有名である。

また、最近はず佐邪馬台国説がしきりに聞かれるようになった。

著者は大分県の歴史の原始・古代の叙述を丹生・早水台から始め、宇佐邪馬台国に至る。次に、五世紀頃の大大分の地を中心とする古墳文化の栄えと、七世紀の豊後国府設置の状況、古代の大大分で忘れることの出来ない宇佐宮と宇佐文化については、中野幡能氏の「八幡信仰史の研究」の成果によって述べる。最後は荘園の発達と武士団の成立について。

中世は大友氏の時代である。鎌倉時代は大友氏の入国の事情、蒙古合戦での活躍と武士の困窮。南北朝時代は足利方に属しての大友氏の奮闘と六郷満山における武家文化の展開。室町・戦国時代は惣領制の崩壊によって内紛が起り、また戦国大名の対立抗争があり、骨肉相喰む政戦両略の上に宗麟時代の大大友氏の全盛期が築き上げられた事情と南蛮文化に筆を及ぼしている。

近世は大友氏の滅亡と小藩分立、農民の生活、都市の豪商、藩政の行詰りと百姓一揆、府内・臼杵の藩政改革と筆をすゝめ、豊後三賢にふれる。

近・現代は大分県の成立の事情、政府に対する抵抗運動としての百姓一揆と西南の役、そして福沢諭吉・大井憲太郎の二人の開明的思想家を登場させる。日清戦争以後は日本資本主義の発展の一環をなす大分県の経済的発展と、その帰結としての大平洋戦争の惨状について。敗戦後は民主化と最近の新産業都市建設にふれているが、それが同時に農・漁村の過疎現象をひき起し、必ずしも手放して喜べない面があることを指摘して巻を閉じている。

この書は、山川出版社の「県史シリーズ」の一卷として書かれたものである。一人で旧石器時代から現代までの通史を書くことは至難の業に属するが、著者は郷土への愛情をこめ、最近の研究の成果をふんだんに取入れて県史を手際よく纏めあげている。なかなか、古代の荘園と豊後武士団の成立、中世の大友氏の発展の叙述は著者の専門領域でもあり、最も精彩を放つところである。あえて云えば、近世以降の叙述が中世以前に比して手薄であること、民衆の生活の叙述がやゝ不足していることであろう。

大分県には未だ県史がなく、よるべき通史が書かれておらず、

読みやすい通史出版が望まれていた時だけに、待望の書ということができる。なお、本文の外には付録として、索引、年表、史跡・文化財一覽等を収めている。(昭四六・八 山川出版社 本文二六六ページ 付録七六ページ 五八〇円)

## 中野幡能著「柳ヶ浦町史」

旧柳ヶ浦町は県の北部、まづかひ 駅館川の左岸の川口附近に位置し、昭和四二年宇佐市となる。著者は「和名抄」に見える酒井郷が柳ヶ浦を含み、「辛嶋田圃」の伝説から柳ヶ浦の開発を平安以前と考える。そして十二世紀、ここに宇佐大宮司公通によって江嶋別符がたてられ、それが今日の柳ヶ浦の基をなしたとする。鎌倉時代までは江嶋別符の領有関係について知られるのみで、柳ヶ浦の歴史は必ずしも明らかではない。南北朝時代以後、豊前は大内氏の支配下にあったが、この頃より漸く名主層の武士化がみられ、戦国時代には「三十六人衆」の自治が行われ、その中に沖巢佐馬助住江今津の名がみえる。戦国中期、大友宗麟の支配下に入り、中世の歴史を閉じる。

近世の柳ヶ浦は初期に黒田・細川両氏の支配を経て、中津藩小笠原氏の治下に入る。細川時代では江嶋村は宇佐郡内で宇佐に次

ぐ大村落を形づくっていた。元禄年間より幕領に編入されたが、ここに米蔵が建てられ、周辺幕領の年貢米の積出しが行われ、経済の中心地としての地位を占めるようになった。そして、弦屋、池田屋らの豪商も発生した。しかし他方、農民の経済的困難が目立ち、幕府の支配が危機にさらされ始める。

柳ヶ浦の近代史は御許騒動で幕をあける。大政奉還後日田県・小倉県の時代を経て、明治八年より大分県に属する。以後、わが国の資本主義の発展にともなって、柳ヶ浦にも銀行・製米工場が設立され、鉄道も開通した。小学校も整備され、高等女学校も出来た。しかし、この間に多くの農民が土地を失った。昭和十三年、ここに海軍航空隊の飛行場が建設され、戦争末期には特攻隊基地となった。ために二十年四月、米軍の爆撃によって柳ヶ浦は壊滅的な打撃をうけるに至った。

以上が本書の第一編 通史の概要である。柳ヶ浦に関する史料は決して豊富ではない。とくに中世以前は史料の不足を傍証史料の博引によってよく補い叙述を進めているところは敬服に価する。近世もほとんど同様である。しかし史料の制約があるにしても、住民の生活の記述を通じて、長い間の住民の苦闘の歴史こそが今日の柳ヶ浦を築き上げたのだということが出来るだけ明らかにさるべ

きではなからうか。ともあれ、柳ヶ浦の出身で、宇佐研究の第一人者たる著者によつて柳ヶ浦の歴史が纏められたことは住民にとつても慶事であるに違いない。

本書は以下、第二編に住氏の姓・職業と壘那寺（明治初年）の表、第三編に人物伝、第四編に史料をのせている。史料「江嶋大鑑」は宝暦九年（一七五九）、井口伝兵衛の編で柳ヶ浦史の基本史料として貴重である。（昭四五・一〇 柳ヶ浦町史刊行会発行 一〇三九ページ 領価四五〇〇円）

### 日田郡教育「増補淡窓全集」全三卷

本書は大正一四年に刊行された「淡窓全集」の増補再刊である。全三卷の内容は次の通りである（◎印が今回増補された分である）。

- 上卷
  - 一 自叙伝 懐旧樓筆記
  - 二 注疏 読論語 読孟子 読左傳 老子摘解
  - 三 語錄 夜雨窠筆記 醒齋語錄 自新錄 再新錄 六橋記聞
- 中卷
  - 一 日記上 淡窓日記 遠思樓日記 欽齋日曆
  - 二 述義 析言 義府 約言 約言補 約言或問 約言或問（國

文）性善論  
 三詩 文 遠思樓詩鈔 遠思樓詩鈔第二編 淡窓小品 文稿拾遺  
 淡窓詩話

四雜 上 迂言 迂言附錄 論語三言解 勸儉告諭 申聞書 発  
 願文 いろは歌 儒林評  
 五追 補 ◎完本約言 ◎南柯一夢抄録  
 下卷

一 日記下 醒齋日曆 進修録 再修録 甲寅新曆  
 二 雜 下 萬善簿  
 三 書 簡 書簡 關係文書 家譜 略系図 凶礼記（抄略） 淡

窓先生年譜附余録 入門簿 咸宜園藏書目錄 淡窓全集総目錄  
 附 録 ◎広瀬淡窓書翰集

広瀬淡窓の詩人・教育者としての名は余りにも有名である。その研究論著は無数、門外漢の筆者の附加うべきことは何一つとしないほどである。しかし、従来の淡窓研究はあまりにも詩人・教育者・思想家としての枠にとじこもっていたように思う。淡窓の広瀬家は幕末、日田金として知られた日田の豪商の一つ

である。広瀬氏はもと黒田氏の家臣であったが、五左衛門の延宝元年、日田豆田町に移り住み、屋号を堺屋、のち博多屋と称したという。以来、農作を営み、蠟油を製し、諸産物を上方に登すを業としたが明和六年、竹田・杵築・府内三藩の用達となった。天明・寛政期以降は経済構造の変化により家運ふるわなかつたが、文化七年に家督をついだ久兵衛の努力によって、天保以降、西国郡代および府内・対馬・福岡の諸藩と深い関係を持ち、あるいは財政改革に、あるいは専売事業を資本に投入し、ついに日田金の筆頭にあげられるまでに成長した。

淡窓はこの久兵衛の実兄であったが、病弱の故をもって家督を弟久兵衛に譲り、自らは教育事業につくした。彼の咸宜園の名はあまねく全国に知れ渡り、その門を叩く者三千余人を教えた。

日田金としての広瀬家は歴代の西国郡代を離れてはあり得なかつたのであり、それは久兵衛の経営と才と淡窓の文才とが両々あいまって実現したのである。彼の自叙伝「懐旧樓筆記」「日記」「家譜」等は詩人、教育者としての淡窓の姿をほうふつさせるばかりでなく、日田の社会経済史研究、広瀬家の経営研究にも貴重な史料を提供してくれる。このような点からも淡窓がかえりみられなければならないと思う（最近、九大教授井上義巳氏の興味

深い研究が発表された）。「淡窓全集」の再刊の紹介の傍々、淡窓のもつ一面にふれて見た。（昭四六・三 思文閣 全三巻総へ  
— 頁数三七四二—二二〇〇〇円）

（野口喜久雄）